

自分を見つめるつづり方へ

～Aさんとの三年間～

<福岡> 矢野勝義

一 出会い

四月、新しい中学校に転勤し一年生の担任になった。入学式の前日、夕方六時すぎ、職員室で入学式の準備をしていると、職員室の電話がなった。近所の方からで、中学生数名がタバコを吸っているから指導して下さいという内容だった。職員室にいた数名の職員で現地に向かった。そこには、新三年生の男の子三人と女の子一人がいた。職員の一人が、「はい、この袋に吸い殻あつめろ！ 来たときよりも美しく！」と言った。一見怖そうな中学生たちが、「すみませんでした。」と言って掃除を始めた。そして、そこにいた三年生の女の子の妹が、明日入学してくるAさんであることを知った。

クラス担任を決めるとき、Aさんのことを聞いた。小学校低学年のころからの家庭の事情で、小学校六年生の時に隣の小学校から、転校してきたのだそう。春休みに、Aさんの姉の担任が家庭訪問したら、妹のAさんは髪を染めているとのことだった。

入学式当日、彼女は「ミニスカート・茶髪・ルーズソック」で登校してきた。職員室では、「スプレーで髪を黒くさせてから入学式にださせる。」「入学式の後で本人と保護者を呼んで指導する。」などの意見がだされたが、私は、「今日は入学式です。本人にも保護者にも『入学おめでとう。』という日です。少なくとも、初対面の人に『あなたの服装はいけません。』などという指導はできません。」と言った。ただ、彼女が教室に来たとき、廊下に呼んで、「入学おめでとう。はじめまして、矢野と申します。初対面の人にいきなりで悪いけど、その髪は、もともと？ それとも染めたの？」と聞いた。彼女は、自分で染めたと答えたので、「髪の毛染めるのは、あんまり良いとは思わないよ。できるなら、近いうちに黒くしておいで。」とだけ伝えた。

入学式翌日の学活で「春休みの間で、心に残っている場面を書こう」というテーマで書かせた。彼女は次の文章を書いた。

かぞくとごはんたべに行ったこと。（四月十日）

私は、お母さんとおねーちゃんと四人でごはんを食べに行きました。／食べにいったところは、食べほうだいのやき肉でした。／いろいろあったのですっご～とおもった。／私の目についたのわやっは肉だった。／みんなといっぱいたべた。／あとサラダもいっぱいあった。／あと自分で好きなものを自分でとれるのがよかった。／あとシューマイやいっぱい食べておいしかった。／またみんなできたいとおもった。

二 『月見会』

一年生の九月、Aさんがある問題を起こした。「反省してる？」と聞くと、彼女は「反省している。もうしない。」と言った。三十分くらい話し込んだ後、「いっしょに勉強しようか？」と言ってみた。断るだろうと思っていたが、「うん。勉強する。」と即答した。「じゃあ、明日から宿題作ってくるけんね。」と言った。

翌日から、昼休みなどに勉強を始めた。「数学の計算・英語の音読・読書・漢字・つづり方」を一日のノルマにした。計算以外は自分でできるので家でさせた。二学期いっぱい、だいたい週二～三回は勉強した。つづり方は、家で書いたり授業を抜け出して保健室にいる時に書いたりした。彼女が書いた文章には赤ペンを入れ、内容に関する話の他、「『てにをは』・原稿用紙の使い方・会話での改行」を中心に文章表現指導をした。そして、次のようなひとまとまりのつづり方も書くようになった。一部だけ紹介する。

月見会（十月十二日）

「Aちゃんいっしょにおだんごの手伝いに行こー」といったのでかていか室にいきました。「おてつだいにきました。」と三人でいったらさっそく、「たきこみおこわをわごむでしめてわりばしをタッパーのうえにおいてわごむでしめて。」といわれたので私はせっせとやりました。それがおわたらおぼんにのせておみせにはこびました。「次は、かみこつぶにあんこをいれておもちを三ついれてくれる？」とおばさんわいそがしいのにおしえてくれました。「わかった。」と私は、いってやりはじめました。「あんたたちつかれたろー。」とおばさんが言ってきました。「これたべんね。」と私たちにひやしぜんざいをくれました。それを三人でたべてまたてつだいはじめました。

「月見会」は校区の取り組みである。彼女は、時々その手伝いをしており、『月見会』は、その時の一コマを綴ったものだ。原文は原稿用紙五枚になっている。小学校時代も含めて、一番長く書いたと本人が言っていた。私は、「大型遅刻・授業抜けだし・短いスカート・化粧」というイメージで見ている同級生たちに、それとは違った彼女の一面を伝えたくて、この文章を彼女といっしょに共同推敲して学級で読みたかったのだが彼女はめんどろくさがってやらなかった。

三 春休みの湯布院合宿

一年が終わり春休みになった。本校ではこの数年、長期休業中に気になる生徒を連れて勉強合宿をしている。彼女も勉強合宿に参加することになった。三月二十九日から三十日に一泊二日で湯布院の青年の家に宿泊した。校長とY先生とわたしの三人で引率した。

合宿の三日前、「何の勉強したい？」と聞いたら、「分数。」と即答した。さっそく小学校に連絡して分数の教材を準備した。

合宿ではよく勉強した。分数も基本的な四則ならできるようになった。

四 陸上大会の帰りに（二年生一学期）

二年生になった。引き続き私が彼女の担任をすることになった。

五月二十七日、郡の中学校合同の陸上大会の夜、情報が入ってきた。Aさんが、陸上大会応援の帰りにレストランにとめてあった小学生の自転車に二人のりして逃げていったというのだ。近所の方から学校に通報があり、生活指導担当のN先生が、彼女の家に行っているとのことであった。N先生の携帯に電話して、彼女を呼び出してもらった。「お前、自転車盗んだとか？」「うん。」「今からそっちにいっけん、覚悟して待っとけ。」かなりきつく言った。

家のドアを開けるとAさんがうつむいて座っていた。「お前、こんなことしよつたらろくな大人にならんぞ。」かなり厳しく叱った。Aさんは泣いていた。その後、横にいたN先生が丁寧にフォローしてくれた。

その週末、母親に学校にきてもらって、本人・担任・校長で今後のことについて話し込む機会を持った。帰るときAさんは、「わたしは来週は一日も遅刻せんで来る。」と言っていた。しかし、遅刻は続いた。

五 職場体験学習をつづる

二年生の十月、職場体験学習が行われた。彼女は、夫婦で二十年以上続けておられる惣菜屋さんで二日間働いた。

(前略) 「じゃあ行ってくるね。」と私は、強く言いました。お母さんは、「がんばってね。」とやさしく声をかけてくれました。

私は、心の中で、(わあ、なんてあいさつしたらいいだろう?) と言って、いきおいよくドアを開けると、

「こんにちわ。」と言われました。わたしは、

「あっ、どうもこんにちわ。」とかたいあいさつになってしまいました。そして、おじさんが、料理をしているところから私を見て、

「こんにちわ。」と言いました。

「今日は、一日よろしく願います。あしでまといになるかもしれないですけどよろしく願います。」と、私は言いました。おじさんは、

「いえいえ。」と言ってくれました。

「それじゃあ、これをつけてください。」とバンダナとエプロンとマスクとゴムの手袋をもらいました。

「じゃあ今から、エプロンとバンダナをはめたら手を洗って用意してください。」

「はあい。」と言って私は手を洗って待ちました。

「じゃあ今日はおいなりさんを作りましょう。」私の仕事はおいなりさんをつくることでした。

(中略) その時、(おじさんが何か作ってる。私も手伝った方がいいのかなあ?) とずっと思っていました。

するとおじさんが、「できたよ! 弁当食べよう。」と言いました。私は、おじさんと二人で食べていました。私が、「おばさんは食べないんですか?」と聞くと、「お客さんが少なくなってから食べるのよ。」と言われました。「そうですか。じゃあ、お先にいただきます。」と言って、パクパク食べました。

お皿とか片付けたら一日終了です。すごく短く感じました。(明日もちゃんと行こう。) 思っていました。

「じゃあ、明日!」と私は言いました。「明日は、朝の七時三十分だから。明日も弁当いらねえからね。」とおじさんに言われました。「わかりました。」と私は言いました。「それじゃあ、気をつけてください。」「はあい。今日はすいませんでした。あしでまといで。」と言いました。おじさんは、「そんなことないよ」と言いました。

先生、世の中あんないい人おるったいね。

六 入院

二年生の冬、Aさんは体調をこわした。投薬と通院の日々が始まった。主治医の先生は二月の沖縄修学旅行に行かないようにアドバイスされたが、本人の強い希望で参加した。緊急時のため宿泊先近くの病院も事前に調べてから出発した。欠席や遅刻が続き、なかなかクラスメートと過ごす時間がなかった彼女だったが、この二泊三日はクラスのみなどと生活することができた。

二〇〇五年四月、彼女は三年生になった。また私が担任することになった。一学期は病気による体調不良などから、遅刻欠席が続いた。学級には、昨年から引き続き同じクラスのメンバーがいたので、

昨年同様、昼休みに数人で起こしに行く日々が続いた。欠席の日の夕方は、私が起こしに行った。登校した日で、気が向いたときは、保健室でつづり方や漢字の勉強をした。

三年生の夏休みの終り、彼女は体調が悪化し、とうとう入院した。私は毎週土曜日、お見舞いに行った。入院中彼女は毎日のようにつづり方を書いた。私は土曜日にまとめて持ち帰り赤ペンを入れて翌週に返した。

入院して一ヶ月ほどたった時に書いたつづり方を、彼女の言葉はほぼ変えずに、私が改行して詩にした。そして、彼女に渡した。

私

私は、病院にいる。／「私なにしてるんだろう？」って考える時もある。／すごく自分を、憎むこともある。／たまに泣きたい時がある。／お母さんとお姉ちゃんが、帰るとき、／先生が帰るとき、後ろを見たら、泣きたくなる。／私はたぶん、「人が恋しいんだなあ。」って思う。／それは、病院に入ってからわかったんだ。／ご飯食べたら、部屋に入って、／ベッドの上で、天井見ながら、／「今、お姉ちゃんとか何してるんだろう？」って時もある。／落ち着いて寝る時も、／みんなのこと考えて寝るよ。／私って変かな？／たまに窓を開けて、空を見るんだ。／昔の私を、空に浮かせて見てるの。変かな？／夜が長くて、最初は怖かった。／でも今は、星を見るのが大好きになった。／ごめんね、みんな。今までバカで、／先生も迷惑かけて。／「はあー。」／ため息が止まない。／早く学校行きたい。

二年半、何度もつづり方を書いた彼女だったが、自分を見つめるような内容は、これが初めてではないかと思う。わたしは、彼女のつづった用紙に直接返事を書くのが申し訳なくて別の紙に次のような返事を書いて彼女に渡した。

会うたびに、Aさんが大人になっていくのがわかります。一人になって、「今までのこと」「あの日あの時のこと」「十四年間のいろんな場面」を思い出しながら、「あの時、『あの人が言ったこと・してくれたこと』にはどんな意味があったんだろう？」と丁寧に振り返っているからこそAさんが成長しているのではないかと思います。

七 高校受験から卒業へ

十二月十三日の三者面談で彼女は、定時制高校の普通科を受験することに決めた。この頃から、午前中の内に学校に来る日もでてきた。

二月からは、受験する高校の過去問を勉強したり、面接の練習をしたりした。休んだ日は、私が夕方、家に上がりこんでいっしょに数学の計算練習などをした。

三月七日と八日の二日間、彼女は高校受験をした。「国語の一番は作文やった。最後の行まで書いたよ。」と言っていた。

二〇〇六年三月十四日、卒業式。そして、彼女の合格発表の日。私は式の最中に彼女の合格を知った。卒業式も最後の学活も終わった後、彼女と母親をLL準備室によんだ。「おめでとう。合格です。」彼女は泣き出した。「A、指切り。絶対高校卒業するって約束。」彼女は小指を出した。

卒業式の日、手紙をもらった。その中で、

「私は学校の先生が大キライやった！でもね、先生とであって、先生が大好きになった。字を書くのもキライだったのに、さくぶんがじょうずになった。」

と書いていた。教科書の内容はほとんど教えることができなかったが、「あたたかい中学校の職員室とあたたかい生徒集団」との関わりの中で、「人間は信用できるのだ」という「人間信頼観」のようなものをつかんでくれたのではないかと思う。

私はAさんへの最後の手紙として、彼女が三年間書いたつづり方から、十三点を選び、一つひとつ

のつづり方に私のコメントを入れ、個人文集にして送った。

彼女は今、高校一年生。時々メールで近況報告がくる。五月には、「英語のSとかVがわからんから教えて」と言って中学校に来た。

六月、久々に家庭訪問をしたら、「たとえ留年しても高校は卒業する」と言った。彼女が高校を卒業できるように陰ながら応援したいと思っている。

